研究所だより

細越　雄二

先日、仕事の関係で、以前勤めていた職場へ1年半ぶりに行きました。いろいろと参考となる情報を教えていただきました同期には感謝いたします。お忙しい時間を割いていただきましてありがとうございました。

さて、その職場を訪れたとき、何とも言われぬ違和感を覚えました。確かに自分はもうその職場に属しているわけではなく、来訪者なのだからそう感じたのでしょう。ただ、国会も始まり、さぞ慌ただしいのだろうと思いきや、思った以上に静かだったのです。いくつかの課を訪れただけですが、どの課も静かなのです。打合せをしている人たちはいるものの、他の職員の方の話し声も聞こえないし、電話をかけている様子も見られない。仕事に専念しているのはよくわかるのですが、この違和感は何だろうかと帰りの電車の中で考えて、その理由が自分なりに分かりました。

それは、仕事のIT化の進展です。他の課との調整、仕事の依頼や質問といったやり取り、情報収集のほとんどはメールやインターネットで済まされているのです。なぁーんだ、それだけのことか、と思われる方もいらっしゃるでしょうが、以前のその職場の様子を知っている者としては、あまりにも無機質な空間に戸惑いを受けてしまいました。

私が社会人になりたての頃(＝約20年前)は、まだパソコンは課に1台もなくて、個人で購入した人が職場に持ってきて使っていました(当時はWindows3.1が主流のころで、それまではMS-DOSを駆使していました)。ですので、調整や仕事の依頼を行う時は、事前に電話をし、かつ、文書(それも手書きの)をその人のところまで持ってきて、うまく仕事をしてもらえるように、会話術を駆使しながらお願いをしたものです。

このように当時は資料をつくる生産性、効率は今と比べて劣っていましたが、生身の人間のコミュニケーションをとりつつ仕事をしていました。そのことを通じて、コミュニケーションの取り方や仕事のやり方を学び、さらには相手の性格や趣味が分かったりもしました。当然、先輩にはよく注意されたり、後輩を熱心に指導したりするということもありました。

今は、パソコンでメールを送って連絡等を行いますが、それでもまだ電話をかけて会話をする方が多いような気がします。職場の中で(休憩時間ですら)会話する機会が減っているとしたら、その職場のメンバーの中でコミュニケーションがうまくとれているかどうか、もしかしたら重大な悩みを抱えていないか、振り返る必要がありそうです。もちろん自分への反省も込めてです。